第Ⅳ章　研究の考察とまとめ

1　研究の成果

１年目の研究の成果は前述（第Ⅱ章）の通りである。以下に簡単に記載する。

（１）新学習指導要領の理解推進
（２）病院の生活、卒業生の活動、児童生徒への理解の深化
（３）学校の目指すもの（「志」と八養版「社会人基礎力」）の作成

２年目の研究成果としては以下の通りである。

（１）新学習指導要領の理解推進継続
　研修の機会は前年度より減少したが、授業実践において新学習指導要領を踏まえたフレームシートを活用したことにより、各職員が指導要領を開く機会が増えるとともに、実践に活かすこととなった。
（２）学部のグランドデザインの作成
　各学部で検討・共有を図った。学部運営の上で、「何ができるようになるか」、そのために「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」を、支援や環境も含めて整理することができた。
（３）「志」と八養版「社会人基礎力」の教育課程への導入
　各学級への掲示、個別の指導計画や各授業の年間指導計画への導入、児童生徒の各種目標への影響など、職員の実ではなく、児童生徒とともに目指す学校教育の「目的」として、教育現場へ導入できるものが作成できたことは大きい。また、今年度はキャリア教育全体計画に盛り込まれたが、次年度からは生徒指導部が担当する月間目標にも盛り込まれることになり、より一層の指導の統一が図られることが期待される。
（４）自己有用感や達成感を目指した指導実践力の向上
　本校では特に体育科での実践において、それまでは見学やあるいは別メニューでの授業を余儀なくされてきた児童生徒が、この学校では「できる」や「できた」を感じ、主体的・意欲的に授業に取り組み、その資質・能力を向上させている例がある。その実践例が今研究のベースであり、スタートだった。今回の研究で、どの教科等もこの「できる」や「できた」を児童生徒が感じられることを目指し、実践に取り組み、実際に達成感を感じさせることや主体的な取り組みに結び付けることができたという結果を実感できた職員もおり、一定の成果は得られたと考えられる。

2　仮説の検証

第Ⅰ章　3-3　研究の仮説
　将来に求められる力を明確にし、本校の教育実践をこれまでの研究成果と新学習指導要領をふまえてさらに昇華させ、「できる」という喜びを感じさせられる教育実践を行うことで、主体的に生きる姿勢が身につき、将来の生活に「生きる（活かせる）力」が育まれ、より良く生きようとする児童生徒が育成できるのではないか。

第Ⅲ章 3-3 グループ協議で、仮説に対する成果や課題をまとめているのでここでは結論のみとする。

【結論】
「できる」という喜びを感じさせられる教育実践は、「志」や八養版「社会人基礎力」を踏まえた活動の中で、児童生徒の自信や意欲、主体的な活動姿勢を育み、その上で取り組まれた各教科等の目標の達成が、将来の生活に「生きる（活かせる）力」の育成につながり、より良く生きようとする児童生徒の育成につながるということができる。

児童生徒への意識付けや、病弱の児童生徒を取り巻く将来の活動場面の理解など、いくつかの課題はある。また、今回で結論は出したものの、テーマとしては単年度で簡単に結論付けられるものではなく、長期での継続した検証が必要ではある。今回協議された改善・解決への方策をもとに、今後は日常の教育活動の中で、継続した取り組みとして実践を行っていく。

３　今後の課題と展望

今回の研究及び病弱教育特別支援学校である本校の現在の教育課題から、今後もさらなる取り組みが必要な課題を次にまとめる。

・新学習指導要領を踏まえた教育課程の実施
・カリキュラム・マネジメントのより一層の実現
・「主体的・対話的で深い学びの充実」に向けた具体的指導実践
・「志」及び八養版「社会人基礎力」の継続的な教育実践と効果的な活用方法の検討
・獲得した「できた」ことの般化
・教科等横断的・学部縦断的な視点での授業づくり、単元計画一覧、教科関連図
・自立活動の実践・評価
・重度心身障がい児の教育、卒業後の継続療養に向けた指導
・神経筋疾患児童生徒の進行性疾患者に対する教育、卒業後に向けた進路・生活指導
・病院及び卒業後の生活理解
・客観的実態把握ツールの模索・客観的評価方法の模索
・本校の教育実践の維持・継承
・遠隔学習の推進
・ｅスポーツの教育的機会の検討
・移転に関わる事項の検討
・フレームシートの内容精選、活用方法の検討

本校は令和２年度に札幌移転が決定しており、ここ数年は特に移転にかかわる課題への対応が増加している。合わせて異動者が増加傾向の状況にあり、移転における課題解決だけではなく、全体の教育実践の方向性の共有やボトムアップを図る研究・研修が求められると考える。また、移転にかかわっては関係機関との連携調整や会議等の増加、教育課程の時間改定などにより研究・研修時間はこれまで同様に維持するのは難しくなる状況もある。職員全体が課題意識を持ち、短時間ながら成果の上がる実感の持てる研究課題、内容の設定が必要である。

以上を踏まえつつ、①病弱及び特別支援の専門性向上を目指すもの、②教育界及び学校全体の直近の課題を解決するもの、③職員全体で取り組むもの、④児童生徒の指導につながるものを念頭に、今後もより一層の学校力向上を目指した研究となるよう、次年度の研鑽につなげたい。